

第6章 台北故宮と「中華」との距離 「建院70周年」と「建院80周年」との間の連続性と非連続性

著者	松金 公正
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
シリーズタイトル	研究双書
シリーズ番号	600
雑誌名	交錯する台湾社会
ページ	209-250
発行年	2012
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00011351

第6章

台北故宮と「中華」との距離

——「建院70周年」と「建院80周年」との間の連続性と非連続性——

松金公正

はじめに

現在の台湾社会が凝集性を高めようとしているのか、それとも発散する傾向にあるのかを、中国への統合の力に対する作用・反作用という角度からとらえることは、本書のひとつの視座であるが、その統合のありようを、「中華」という概念を通じて考察することは可能であろう。しかしながら、一口に「中華」といっても、その概念はきわめて広義に解釈が可能なものであり、具体的な事物を事例として取り上げることなしに、台湾社会のなかでいかなる変化をとげてきたのかを論じることは難しい。

そこで、直接的に現在に及ぶ「中華」概念を台湾に持ち込んだのは何者なのかということを考えてみると、植民地時期およびそれ以前の中国本土からの影響とともに、中国共産党（以下、共産党）との内戦に敗れ、台湾に移転した中華民国・中国国民党（以下、国民党）政府による影響は看過できないであろう。国民党は、中国本土の実効支配権を失いながらも、対外的には自らこそが正統な中国全体の統治者であり、また「中華」文化⁽¹⁾の継承者であるという姿勢を呈示しつつ、台湾内に対しては、中華文化復興運動など、「中華」を内在化させる教育・文化政策を推進した。そのようななか、1965年に台北に設立⁽²⁾されたのが、国立故宮博物院（以下、台北故宮）であった。

この台北故宮は、その設立以来現在に至るまで、日本で発行される台湾のガイドブックにおいては「中国文化の殿堂」と紹介されるとともに（松金 [2011: 55-57]）、台湾におけるもっとも重要な観光地のひとつとみなされてきた。また、1983年から2000年まで台北故宮院長の職にあった秦孝儀が「今日故宮は、すでに世の人々が認める中華民族文化のお手本である」（秦孝儀 [1996: 13]）と述べていることからわかるように、台北故宮は、「中国文化」、そしてその精髓としての「中華」の内外への発信源、ないしは象徴的存在と位置づけられてきた。そのため、台湾において台北故宮がいかなる存在と位置づけられてきたのかを分析することは、台湾における「中華」の位置を知る重要な手がかりとなるものといえよう。

しかし、かかる視点より台北故宮を論じた先行研究は必ずしも多くない⁽³⁾。また、台北故宮の歴史的経緯に関する事実確認についても不十分な点が散見される。そこで、筆者は松金 [2011] において、2000年の国民党から民主進歩党（以下、民進党）への政権交代以降の8年間、台北故宮でいかなる変革が起ったのかについて、2008年の「国立故宮博物院組織法」（以下、組織法）の制定に至る条文案の変化と本館リニューアルを軸に、その流れを概観するとともに、中国皇帝のコレクションの台湾における位置づけの変化を論じることを試みた。そこで述べた論点の概容は次のとおりである。

中国本土から運ばれてきた歴史的文物を一時的に保管する容器に過ぎなかった台湾にとって、それら文物は、本来自らとは無関係の皇帝のコレクションであり、外在的な「中華」としての性格をもつものであった。それにもかかわらず、国民党政権によって、台湾こそが「中華」を継承するものとされたことから、台湾の人々に対し、文物を通して「中華」を内在化させる装置としての側面を付与されつつ、台北故宮は設立される。しかし、結果として台湾の人々にとって、台北故宮の文物は、学習し修得するもの、つまり外在的な模範的「中華」として取り扱われていくことになった。

そのようななか、政権交代にともない民進党政権下で行われた一連の変革は、台湾を統合する概念を「中華」から「台湾」へと移行し、従来の「中

華」の精髓としての台北故宮の文物の価値を否定するものとの判断を受けることになる。しかし、民進党政権下の台北故宮院長たちの発言や施策の分析を通じてみえてくるのは、従来の台北故宮の歴史的文物に対する意義づけや価値づけを正面から否定しようとするものではなかった。台北故宮の文物をすでに長期間台湾に存在し続けてきたものとみなし、あくまで多元社会としての台湾を形成する重要な一要素として、位置づけ直そうとするものであった。具体的には、台湾に住む人々がそれら文物と積極的に接触することを勧め、故宮の文物を手がかりに新たな文化を創造していくことを目指すという目的が掲げられることになる。つまり、国民党政権期に目指された「中華」の内在化が、形を異にして民進党政権下で現出することになった（松金[2011: 68, 90-91]）。

上記のような台北故宮の変容からみえてくるのは、「中華」と「台湾」をすべからく二項対立の図式としてとらえるべきとすることへの疑義であり、また、国民党と民進党それぞれの政権下で行われた台北故宮の運営を対立の構図のみに固執して論じることあまり大きな意味がないということであろう。つまり民進党政権下での台北故宮の変革は、決してすべてが民進党独自の発案ではなく、政権交代以前より国民党によって進められてきた変革を踏まえた上で継続的に進められていった可能性を考えてみる必要があるのではないだろうか。行政機関としての台北故宮には、従来の経緯や前政権の方針に一定の縛りを受けつつ新たな方向性を模索しなければならないという側面があったと推察することは可能ではないだろうか。しかしながら、民進党政権期、それも組織法改正に焦点を絞った松金[2011]では、この点を十分に明らかにすることができなかった。

そこで本章では、北京に故宮博物院が開設されてから70年を意味する「建院70周年」(1995年)、および80年を意味する「建院80周年」(2005年)前後の台北故宮の連続性と非連続性に着目する。ちょうどこの間に国民党から民進党への政権交代が生じているが、いったいどういった点が断絶し、何が継承されていたのであろうか。かかる視角より台北故宮と「中華」との距離の

変容に迫りたい。

ここで本章で使用する資料について若干の説明を加えたい。台北故宮は、行政機関であるため、その予算と決算は立法院での審議と承認が必要である。また、国民党政権期は、立法院のほか、国民党中央常務委員会での報告を求められることもあった。そのため、台北故宮の業務内容については、3カ月、半年ないし1年ごとに、立法院や国民党中央常務委員会に定期的に報告するためにまとめられた文書が残されており、そこから業務の概要を知ることができる。

1970年に『國立故宮博物院六年工作報告』が作成されて以来、1971年から2000年までは『國立故宮博物院工作概況』が、2001年から2008年までは『國立故宮博物院工作報告』が、2009年以降は『國立故宮博物院工作概況報告』が作成されてきた。これらは、台北故宮の業務内容を報告することを主たる目的として作成された資料であり、それぞれの時期の活動をうかがうことのできる資料である（以下、『工作概況』）。このほか、国民党に活動概況や今後の活動方針を報告するために作成された資料も存在する（秦孝儀 [1995, 1996, 1997]）。また、2001年以降は、これらに加え毎年『國立故宮博物院年報』が作成されている。

本章では、これら台北故宮により編集・発行された行政的な報告資料等を用いることにより、台北故宮が自らをどのような存在として位置づけ、そこにいかなる変容があったのかについて検討を進める。また、その検討にあたっては、とくにこれら資料に現れる歴代院長の発言を機関首長としてのものにとらえ、いかなる意図をもって台北故宮が運営されていったのかという側面に分析を加えることにより、それぞれの時期に求められた台北故宮の役割を把握しつつ論を進めることとする。

まず、第1節では、台北故宮の組織法上の位置づけを先行研究に基づき示した上で、予算規模や沿革の概略を示す。次いで第2節では、台湾に復活した当初の台北故宮に付与された対外的に、そしてまた台湾内に「中華」を宣揚するという役割を明らかにする。その上で、実際どの程度その役割を台北

故宮が果たし得たのかについて検討し、対外的な成功を強調しながら、対台湾内への宣揚に問題を抱えていた状況に言及する。第3節においては、「建院70周年」、「建院80周年」を記念して著された沿革史の時期区分の差から両者の差異を検討しつつ、両者の間で連続しているものは何か、また、連続していないものは何かを考えたい。そして最後に第4節では、民進党政権末期に実際に行われていたことと、2008年の国民党の政権復帰により、新たに打ち出された台北故宮の運営上の方向性との間の関係性について言及し、政権交代とは必ずしも直結しない台北故宮のありようについて検討を加える。そして、本来「中華」を世界に宣揚し、台湾の人々に内在化させる装置としての役割を企図されて設置された台北故宮が、台湾のなかに包摂される「中華」のあり方を示す存在へと変容していくさまを呈示する。

第1節 台北故宮の法的位置と沿革

本節では、台北故宮の法的位置づけと予算規模、また歴代院長について述べた上で、いかなる変遷をたどって現在に至っているのかについて概観する⁽⁴⁾。

1. 法的位置と予算規模

一般的に故宮博物院とは、北京および台北にある中国の歴史的文物等を収蔵している博物館のことを指す。北京のものは紫禁城内にあり、正式名称は「故宮博物院」（以下、北京故宮）、台湾のものは、台北市郊外の士林区にあり、正式名称は「国立故宮博物院」という。

故宮とは、もとの宮殿の意味で、明朝の北京遷都以降本格的に建設が始まり、清朝最後の皇帝宣統帝にいたるまでの歴代の皇帝の宮殿であった紫禁城、および瀋陽に置いていた宮殿のことを指す。北京故宮は、紫禁城の建築群そ

のものを博物館として利用しているため、故宮という名を冠せられている。それに対し、台北故宮は、宋・元・明・清の4つの王朝の宮廷に収集・保存されていた文物を主要なコレクションとしており、これらは、国民党政権によって、中国本土から台湾へと移送されたものである。

2008年1月に定められた組織法第1条によると、台北故宮は、その設立の主旨として「国立北平故宮博物院および国立中央博物院籌備（準備）処が所蔵していた歴代王朝の歴史的文物や美術品を整理、保管、展示し、かつ古代中国の歴史的文物や美術品に対する収集・研究・普及活動により社会的な教育効果を高める」ことをうたっている（松金 [2011: 60-62]）。つまり、展示物の多くがもともと紫禁城に所蔵されていた皇帝のコレクションであったことから故宮と名づけられていることがわかる。ただし、台北故宮のコレクションは、組織法にあるとおり、国立中央博物院籌備処（以下、中央博物院）に所蔵されていた文物や台湾に移動した後に収集された文物などから構成されており、すべてが皇帝のコレクションとはいえない。中央博物院は、近代国家建設を進める中華民国にとって、自然科学・人文科学・現代工芸分野全般にわたる展示と陳列を行い、国家意匠を示すために首都南京に設置が決定された博物館であり、当時の先端科学技術を用いた研究・保存・展示を目指した。台北故宮が中央博物院的継承者でもあるということは、台北故宮の社会教育への取り組みや保存・展示における科学技術の使用に大きな影響を与えることとなったと考えられる。

また、同条には、「本院は行政院に属する」とある。このため行政院に隷属する台北故宮の予算は、中華民国中央政府総予算の「(款) 行政院主管」のなかに「(項) 国立故宮博物院」として計上される。2010年度法定予算をみると、中華民国中央政府総予算（歳出）約1兆7149億元（以下、「元」は新台幣ドル「新台幣」を指す）に対し、台北故宮の予算は、およそ10億元であり、総予算の約0.06%を占めている⁵⁾。

中華民国中央政府が所管する所謂「国立」の博物館・図書館・記念館・資料保存機関（以下、博物館等）には、大きく分けて総統府所管・行政院所管・

行政院教育部所管・行政院文化建設委員会所管の4種があるが、台北故宮の予算規模は、ほかのいかなる博物館等よりも大きい。総統府に直属する公文書保存機関である国史館とその下部機関である台湾文献館を合わせた予算は、約3億7000万元である。行政院文化建設委員会が所管する国立台湾文学館、国立台湾博物館、国立台湾歴史博物館の業務費は、それぞれ約1億8000万元、約3億6000万元、約4億6000万元である。教育部が所管する国家図書館、国立台湾史前文化博物館、国立編訳館、国立国父紀念館の予算は、それぞれ約4億元、約3億9000万元、約1億5000万元、約2億5000万元である（行政院主計處 [2010]）。

2010年度の台北故宮の予算には2億3000万元程度、国立故宮博物院南部院区（以下、故宮南院）建築のための特別予算が計上されているため、総額のみによって単純にその多寡を比較することはできない。しかし、この故宮南院経費を除いたとしても、予算は6億～8億元程度となり、台北故宮の予算規模を単独で超える博物館等は台湾に存在しないことがわかる。

2. 歴代院長

本章では、台北故宮の首長である院長の発言を主たる材料として、その運営にいかなる意図が含まれていたのかについて検討を加えていく。そのため、次に台北故宮の運営に携わってきた歴代院長について略述する。

1965年の設立以来2000年に至るまでの国民党政権下における院長は2名である。初代院長は、中華民国の公設図書館の設立に深く関与し、国立中央図書館（以下、中央図書館）館長を勤めた蔣復璁（任期1965～1983年）であった。また、第2代院長は、蔣介石の側近のひとりである国民党副秘書長、中央委員、党史委員会主任委員を歴任した秦孝儀（任期1983～2000年）であった。いずれも学者ではあるが、国民党员として党务、政務に精通した人物であり、それぞれ20年弱という長期間にわたり院長の座にあった。

民進党政権下においては、いずれも研究者出身の3人の院長が任用された。

まず第3代院長には、台湾を代表する中国古代史学者であり、総統府直属の研究機関である中央研究院の院士であり、同院歴史語言研究所所長職にあった杜正勝（任期 2000～2004年）が任じられた。次いで第4代院長には、中央研究院歴史語言研究所出身の石守謙（任期 2004～2006年）が副院長から昇格し、さらに第5代には、国立台北師範学院（現国立台北教育大学）美術系の教員を経て、台北市立美術館長を務めた経験をもつ林曼麗（任期 2006～2008年）が副院長から昇格した。

2008年に行われた総統選挙の結果、馬英九が当選し、国民党が2000年に失った政権を奪回すると、馬政権は、蔣復璁・秦孝儀両院長の秘書、台北故宮の展覧セクションの責任者などを歴任し、政権交代により、一時台北故宮を離れ輔仁大学に在職していた周功鑫を第6代院長に任命した。

つまり、台北故宮の院長はすべからく研究者としての業績をもつ人物が任命されているという共通性がある。しかし、その一方で、院長に至るまでにどのような職歴を経たのかという点において、党の要職を歴任した経験をもつ蔣復璁・秦孝儀、研究機関に長く在職していた杜正勝・石守謙、研究とともに博物館・美術館行政に実務的にも携わってきた林曼麗・周功鑫といった相違点もみられる。

3. 沿革

それでは、台北故宮はどのような経緯をたどって現行の形態に至っているのでしょうか。本節の最後にその来歴について概観する。

辛亥革命によって成立した中華民国は、1914年に熱河の避暑山荘と瀋陽故宮の清朝皇室の文物などを紫禁城外廷に集め、古物陳列所を設立して一般に開放した。さらに、1924年にすでに退位していた宣統帝溥儀を紫禁城から退去させた後、清室善後委員会を設立し、所蔵文物の整理を始めた。

その後、紫禁城の敷地を利用して1925年10月10日に故宮博物院を開設し、一般への公開を始めた。1928年6月に国民党の北伐軍が北京に至ると、故宮

博物院は接收され、1929年2月には易培基が院長に任命された。

1932年7月に入ると、満洲に侵攻していた日本軍が華北へ迫る可能性が高まった。中華民国政府は、故宮博物院の所蔵品を日本軍から守るために、所蔵文物を選定して箱に詰め、移送できる準備を整え、1933年にまず上海まで運んだ。同年馬衡が院長に任命された。また、1934年2月、「国立北平故宮博物院暫行組織條例」を公布し、故宮を行政院の管轄とした。1936年12月には、上海から南京朝天宮に1万9557箱の文物が運ばれ、翌年1月、故宮博物院南京分院が設立された。しかし、日本軍の進攻とともに、文物もさらに中国内陸部へと移動せざるをえず、最終的に四川省巴県・樂山・峨眉等に運ばれることとなった。古物陳列所の文物もまた故宮文物と同様に移送されることになり、1933年に南京に設置された中央博物院に編入された。

1945年、日本の敗戦により、巴県・樂山・峨眉等の文物は重慶に運ばれ、1947年、重慶から南京まで移送された。ところが、1948年に入ると、国共内戦において敗色が濃厚となった国民党は、文物のうち重要なものを選定して台湾へ移送することにした。最終的に計2972箱が3回に分けられて台湾まで運ばれることとなった。この時、中央研究院歴史語言研究所の考古發掘資料や拓本、中央図書館の善本、中央博物院の文物なども台湾へと移送された。

紫禁城に残されていた文物や北京へと返送された文物は、1949年1月に人民解放軍によって北京が解放されると、共産党によって接收されることとなった。同年10月に中華人民共和国が成立すると、中央人民政府文化部文物局の下で運営されることになり、1954年には吳仲超が新体制下での最初の院長に任命された。

一方、移送先の台湾では、国立中央博物図書館聯合管理処が設立された。同処は、台中県霧峰郷北溝に倉庫を建て、故宮博物院、中央博物院、中央図書館から台湾に移送された文物の管理を行なった。1957年には、北溝陳列室が正式に開放され、一般に公開されることになったが、同陳列室は狭隘であったため、台北市外双溪に新館を建設することとなった。新館は孫文生誕100周年を記念して「中山博物院」と名づけられ、1965年11月12日に開院

の式典を行った。初代院長は先述した蔣復璁である。その後、1966年に中国本土の文化大革命に対し中華文化復興運動が始まると、台北故宮は中華民國こそが中華文化を正統に継承しているという主張を証明する役割を担うことになる。

このように、当初故宮という名をもつ博物館は、1925年に北京に設立され、その後、1965年に台北に「復活」した。そのため、台北故宮は、1925年を「建院」、1965年を「復院」と呼ぶ。つまり、台北故宮には、アニバーサリーを示す2つの表現が存在する。1995年は「建院70周年」であると同時に「復院30周年」、2005年は「建院80周年」であると同時に「復院40周年」ということになる。

2000年に行われた総統選挙の結果、陳水扁が当選し、国民党から民進党への政権交代が行われると、杜正勝が院長となり、「故宮 新世紀」と銘打ち、学術研究の強化や国際交流の促進を進めることとなった。また、2007年2月には、本館の全面的なりニューアルを終えた。この間、アジア博物館としての位置づけを与えられた故宮南院を開設するといった計画が提出された（板倉 [2008]）。他方、これら一連の改革に対し、国民党の立法委員からは、台北故宮が民進党政権の本土化のなかで、「脱中国化」を進めているのではないかとの疑義が加えられた。

その後、2008年に行われた総統選挙の結果、馬英九が当選し、国民党は2000年に失った政権を奪回することに成功した。馬政権は、院長に台北故宮生え抜きの周功鑫を任命した。周功鑫院長は、台北故宮の特色を生かした展示、博物館の産業化、若者の取り込み、先端技術を使った展示・保存といった動きを進めるとともに、北京故宮との関係を強化し、両者の交流促進を進めている。

第2節 「復院」当初の台北故宮に求められた役割

前節で、1965年に「復院」という形で台北故宮が台湾に設置されたことを述べた。それでは、なぜ「復院」されたのであろうか。本節では、「復院」当初にいかなる役割が台北故宮に求められたのか。台湾内への役割と対外的な役割について検討を加えることを通じて、「復院」の目的を考察するとともに、それがどの程度の成果を持ち得たのかについて考えを及ぼしたい。

1. 台湾内への「中華」の扶植と内在化

まず、「復院」した当初の台北故宮に、いかなる役割が求められたのかという点から考えていくこととしたい。「復院」7年後の1972年に出版された『工作概況』では、業務内容について、以下のように述べられている。

「当院の業務は、文物の保管・整理を行うことで、さらに学術研究を進めています。また、展示を行うことで、より多くの人々に文物を広めるというサービスも行い、近代的な博物館としての基準達成を目標としています。文物の安全を確保するために鑑定をいかにして守るか、歴史的文物に関する科学的な分析を行うため、系統立てた科学研究を行います。このため、科学研究に関する設備の充実に力を注いでいます。そして、中華文化と国際文化との交流を宣揚するため、出版業務の強化も続けています」（國立故宮博物院 [1972: 1]）。

ここには、台北故宮の主たる業務として、4つのことが述べられている。まず1つめは、北平故宮博物院や中央博物院などから台湾に持ち込んだ文物の保管・整理および学術研究を進めるということである。2つめは、展示することを通じて、それら文物に対する人々の理解を進める教育を行うことで

ある。3つめは、博物館としての水準を満たした科学技術を用いて、文物の保護・分析を行うということであり、4つめは、「中華」文化を宣揚するとともに国際文化交流を進め、出版業務を強化するということである。

第1の目的は博物館の通常業務として重要である。そして、それを実行するために、第3の目的である科学技術の研究・活用というのは欠かせないものであろう。しかしそれと並んで、文物の保管・整理・研究に立脚して、文物に対する理解を深め、「中華」文化の宣揚へと繋げていく立場が、注目されていたことがこの時期の特質といえる。そしてこのような立場が、台北故宮設立当初より重視されていたことは、1965年に台北故宮の初代院長となった蔣復璁が、それまでの書き溜めた文章をまとめ、1977年に出版した『中華文化復興運動與國立故宮博物院』（中華文化復興運動と国立故宫博物院）において、故宮の任務を以下のように述べていることからうかがえる。

「故宮博物院は、社会教育や学術研究方面に自らが有する役割を發揮するほか、中華文化復興運動の声があがるなか、より重い責任を負うようになりました。我々としては、皆さんに故宮が所蔵する豊富な文物を通じて、悠久なる中国の歴史を理解してもらいたいと思っています。そして、そこから強く結束した求心力が自然とわきあがり、また、宝物の背景を通じて、深い憂慮こそが聡明なる知識を導きだしてきたこと、多くの困難こそが国家を發展させてきたことについての真義をなんとかして体得してもらい、それにより我々中華民族としての自信を高めていって欲しいと思っています。こうした目標に向かって、当院は開設以来、管理委員会の指導の下、職員一同この目標に向かって努力してきました。国からの委託に恥じないよう、展示面や出版面、そしてその他イベントに関しても不断の改良を行ってきました」（蔣復璁 [1977: 序1]）。

上記の文章から、台北故宮の主たる任務は、もちろん社会教育と学術研究である。しかし、そこにとどまらず、それを踏まえて、豊富なコレクション

を通じて、台湾在住の人々に中国の歴史の悠久さを認識させ、強固な求心力に結実させ、「中華」民族としての自負を高めるという目標が強く認識されていることがわかる。蔣復璁は、このように運営していくことこそが「国からの委託に恥じない」ことであるとし、国策として進められていた中華文化復興運動のなかで、台北故宮が重要な責務を担っていると認識していたことがわかる。

つまり、「復院」当初の台北故宮の台湾内向けの役割は、そのコレクションを通じて台湾の人々に中国の歴史を呈示し、強固な求心力としての「中華」を扶植するということにあったといえる。

2. 対外的「中華」文化の宣揚

他方、台北故宮が日本をはじめとする海外からの多くの見学者を獲得し、対外的な「中華」文化の宣揚に対し、大きな役割を果たしたということは、一般的にいわれるところである。しかし、いつごろからそのような施策が導入され、また、いったいどの程度の成果をあげたのかという点に関しては、十分な検証がなされてきたとはいえない。はたして「復院」当初の台北故宮は、本当に海外の人々にとって魅力ある訪問地となり、多くの観光客を獲得し、「中華」文化の宣揚という役割を果たし得ていたのであろうか。

蔣復璁は設立後3年経過時において、すでに見学者は160万人を超えており、海外からの観光客を台北故宮に誘致し、「中華」文化のすばらしさを宣揚するという点で一定の結果を残していることを以下のように記している。

「故宮博物院は、1965年の国父孫文の生誕100周年の日に台北の外双溪で文物展示を公開して以来、今年で満3年となりました。来館者数も160万人を超え、台湾を観光で訪れた人で故宮を見学しない人はいないとまでいわれています。友好国の元首・使節・来賓の方々にも、時間が許すようであれば必ず故宮に足をお運びいただいています。また、日本・香港・韓国

からのお客様は、故宮を見学し眼福を得るために、とくにスケジュールをくんでいらっしゃいます。ここ2年、台湾への観光客数が急激に増加しております。これも故宮博物院の開館と大きく関係しております。この点をみますと、故宮博物院は当初の目的の第一歩を達成しているといえ、観光事業発展という使命を果たしたといえましょう」(蔣復璁 [1977: 51-52])。

ここには、「台湾を観光で訪れた人で故宮を見学しない人はいない」と、日本・香港・韓国をはじめとした台湾を訪れる観光客が、観光コースに必ず台北故宮を入れていることを論拠とし、台北故宮の存在が訪台観光客の急増に貢献していることが記されている。しかし、実質的に「復院」が台湾の観光客獲得に直接的に結びついたといえるのであろうか。

台北故宮の入場者数を検討する前に、まずはそもそも当時どのくらいの海外からの旅客が台湾を訪れていたのか。1965年前後の訪台観光客数を台湾交通部観光局の『観光統計年報』⁶⁾により見てみると、表1のように、台北故宮設立前年の1964年は8万3017人だったが、1968年には25万599人になっており、その間約3倍に増加していることがわかる。たしかに蔣復璁の発言中にある「2年」間と推定される1965年から1966年と1966年から1967年の成長率と増加数は、それぞれ35.30%、4万1819人と23.67%、3万7939人であり、成長率・増加数ともに高い数値を示している。しかし、訪台外国籍旅客数の前年比の伸びは、1961年に67.49%の最高値を記録した後、1970年に至るまで、20%を下回ったことはなく、うちもっとも低いのが、前記した1966年から1967年にかけての23.67%である。そういった意味では、外国籍旅客数増に直結する第1の要因とみなすことは難しい。当該時期の日本人の海外旅行者数の増加については、1964年の海外旅行解禁や海外交通網の整備などに関連づけて考えることが一般的であり、台湾を訪れる日本人数もそれに応じて増加したといえよう。

他方、「中華」の対外的宣揚については、外国人にとどまらず、在外華僑も主たる対象であった。華僑旅客を含めた來台旅客総数については、1964年

表1 來台旅客数 (1959~1972年)

	総計		外国籍旅客数		華僑旅客数	
	人数 (人)	成長率 (%)	人数 (人)	成長率 (%)	人数 (人)	成長率 (%)
1959	19,328	15.67	17,634	13.35	1,694	47.05
1960	23,636	22.29	20,796	17.93	2,840	67.65
1961	42,205	78.56	34,831	67.49	7,374	159.65
1962	52,304	23.93	44,625	28.12	7,679	4.14
1963	72,024	37.70	61,348	37.47	10,676	39.03
1964	95,481	32.57	83,017	35.32	12,464	16.75
1965	133,666	39.99	118,460	42.69	15,206	22.00
1966	182,948	36.87	160,279	35.30	22,669	49.08
1967	253,248	38.43	198,218	23.67	55,030	142.75
1968	301,770	19.16	250,599	26.43	51,171	-7.01
1969	371,473	23.10	321,188	28.17	50,285	-1.73
1970	472,452	27.18	409,756	27.58	62,696	24.68
1971	539,755	14.25	466,570	13.87	73,185	16.73
1972	580,033	7.46	499,715	7.10	80,318	9.75

(出所) 交通部觀光局行政資訊系統『觀光統計年報』(<http://admin.taiwan.net.tw/statistics/year.aspx?no=134>, 2011年12月11日アクセス)の「2010年歴年來台旅客統計 (1956-2010)」より筆者作成。

に9万5481人だった外国籍旅客数が、1968年には30万1770人になっており、その間約3倍に増加していることがわかる。同様に1965年から1966年と1966年から1967年の成長率と増加数を見てみると、それぞれ36.87%、4万9282人と38.43%、7万300人であり、ともに外国籍旅客数のみを対象にした場合より、さらに高い成長率を示している。これは、1966年に2万2669人であった華僑旅客が、1967年には5万5030人と、成長率142.75%と急増していることなどに起因する。つまり、華僑旅客の増加と台北故宮の設立は、状況証拠的には呼応している。

ただ、そのような華僑旅客の事情を考慮したとしても、1960年代は訪台外国籍旅客数が飛躍的に増加した時期といえ、それにもなつて台北故宮を訪れる海外からの見学者数も増えていったと考えることが妥当であろう。

また、表2は、『工作概況』に基づき1965年から1970年までの台北故宮の

表2 台北故宮入場者数（1965～1970年）
（単位：人）

	外国人	日本人	合計
1965	15,405	143,544	158,949
1966	165,850	498,990	664,840
1967	176,932	407,850	584,782
1968	181,907	412,865	594,772
1969	186,018	442,406	628,424
1970	196,217	598,472	794,689

（出所） 國立故宮博物院『國立故宮博物院六年
工作報告（中華民國54年9月～60年6月）』
（1971年）より筆者作成。

（注） 1965年は11月12日以降の入場者数。

入場者数を示したものである。1966年は4人に1人が外国人，1968年には全体の30%強が外国人であり，「復院」当初，入場者全体に占める外国人の割合が高かったことがわかる。

さらに，表1にあるように1966年に台湾を訪れた外国籍旅客数は16万279人であり，統計上は台北故宮に入場した外国人数（16万5850人）より少ないことになる。1967年から1970年にかけて，訪台外国籍旅客数はそれぞれ19万8218人，25万599人，32万1188人，40万9756人と増加しつづけた。総数が増えることにより，そのなかに占める故宮入場者の割合は減少するものの，1970年時点でも，訪問者の約48%が台北故宮を見学している計算になる（交通部觀光局 [2010]）。複数回の入場者が相当数に上らないかぎり，多くの訪台外国人が，「復院」まもない台北故宮を訪れていたと想定できる。つまり，「復院」当初から訪台外国籍旅客にとって，台北故宮は重要な見学地とみなされていたことは明らかであり，そういう意味で，対外的広報という面では一定の成果を挙げていたことがわかる。

3. 「復院」当初の台北故宮における「宝物」

このように外国籍旅客に台北故宮を見学させるという目的は，一定の成果

をあげることができたと考えられる。他方、蔣復璁は、「復院」当初に多くの外国籍旅客を獲得したことは、あくまで初歩的な目的を達成したに過ぎないと述べている。そして、台北故宮の任務はここにとどまらず、社会教育と学術研究において大きな責任があり、所蔵する「宝物」を通じて、台湾の人々に中国の歴史の悠久さを教え、そのことを基盤とした求心力を高め、「中華」民族としての自負をもたせなければならないとする（蔣復璁 [1977: 52]）。このことから、蔣復璁が企図した台北故宮が果たすべき本質的な課題は、対外的な「中華」の宣揚ばかりではなく、台湾内における「中華」の扶植と内在化であったといえる。

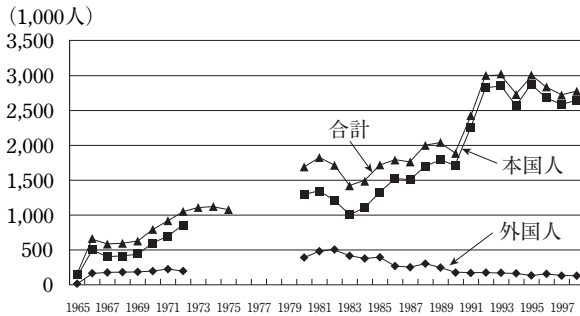
このような役割を台北故宮が果たしうると蔣復璁が考えるのは、「中華文化を『証明』するものが、ここ故宮に集まっている」（蔣復璁 [1977: 52]）からである。「集まっている」ものがいわゆる「宝物」であり、それは中国本土から台湾に運んできた皇帝のコレクションである。つまり、「復院」当初の台北故宮において、蔣復璁は、中国本土より移入した「宝物」とその背景としての歴史をもって、台湾社会を結束させる求心力としようとしていたことがわかる。

それでは、かかる教育的目標を掲げた台北故宮に、台湾内からどのくらいの人が見学に来たのであろうか。また、外国人の比率はその後も常に高かったのであろうか。

『工作概況』を主たる資料として作成した入場者数は図1のとおりである。台北故宮所蔵の『工作概況』には欠落があり、また、すべてのものに外国人、本国人の内数があるわけではない。また、1999年以降は、統計の取り方がそれまでと異なるため、1998年までの数値を示すにとどまる⁽⁷⁾。

ここからわかるように当初20~30%を占めていた外国籍入場者の比率は、その後低下していくことがわかる。『工作概況』の統計のとり方にも問題が完全にはないとはいえないが、1990年代に入るとその傾向はさらに進むことがわかる。一方、図からは「本国人」⁽⁸⁾の入場者が徐々に増加している様子がわかる。

図1 国立故宫博物院入場者数（1965～1998年）



(出所) 『工作概況』各年版をもとに筆者作成。

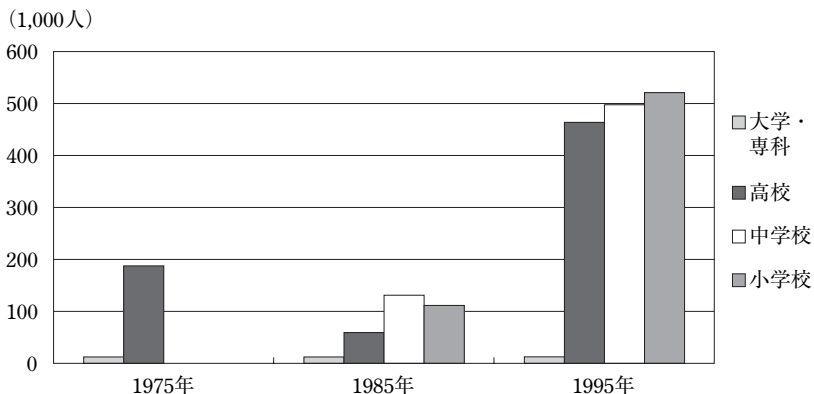
(注) 1973～1979年については、『工作概況』の資料に欠落があるため、図示できていない部分がある。なお、『工作概況』の詳細については本文を参照のこと。

他方、図2は、台北故宮の「建院50周年（復院10周年）」（1975年）・「建院60周年（復院20周年）」（1985年）・「建院70周年（復院30周年）」（1995年）時における小学校（初等教育機関）・中学校・高校（以上、中等教育機関）・専科学校・大学（以上、高等教育機関）所属の児童・生徒・学生が学校単位で見学を申し込み、見学した際の人数である。

1975年の統計では、初等教育機関と中等教育機関の内訳が示されていないので、両者をまとめて示しているが、経年とともに見学者数が増加している様子が知られる。とくに1995年には、それまでと比べ、初等および中等教育機関からの見学者の増加が大きいことがわかる。

上記の入場者／見学者数の変遷のデータに基づいて考えるならば、台北故宮への入場者は、1960年代から1970年代にかけて中華文化復興運動が展開されたときよりも、1987年に戒厳令が解除され、台湾における政治の民主化や経済の自由化が進む1990年代前半の方が増加している。また、表2にあるように、1966年から1970年にかけての本国人入場者数は、40～60万人にとどまっていた。他方、入場者の増加後、外国人は総数において主要な部分を占めることはなくなった。

図2 児童・生徒・学生入場者数



(出所) 『工作概況』各年版をもとに筆者作成。

(注) 1975年に関しては、資料中に高校・中学校・小学校の分類がないため、高校に中学校・小学校を含めて表示している。なお、『工作概況』の詳細については本文を参照のこと。

なお、1990年から1992年の間の差は、自然増というにはあまりに開きがあり、ここに統計を集計する上での変更がある可能性は高く、別途検討が必要であろう⁽⁹⁾。また、本統計によれば、1993年の302万人をピークに、入場者数は微減傾向にあったことがわかる⁽¹⁰⁾。

「復院」当初の段階で台北故宮に求められた役割は、まずは対外的な「中華」文化の宣揚であった。しかし、もっとも重要な課題は、台湾の人々へ「中華」を扶植することであり、中国から移送された皇帝のコレクションを「宝物」とし、その背景にある歴史を内在化させ、それを台湾社会の求心力にするということであった。このうち対外的な役割については、ちょうど台湾を訪問する外国籍旅客が増えた時期と重なっているため、統計上は一定の成果を得ることができたように見える。他方、台湾の人々への「中華」の扶植については、初等および中等教育主導を除いては、十分な見学者を集めることはできていたとはいえ、必ずしも理想的な状況ではなかったのではないかと推察できる。

第3節 「建院70周年」と「建院80周年」

前節では、「復院」当初の台北故宮の役割について、対外的なもの台湾内におけるものに分けて考察を進めた。そして、台湾内への「中華」の扶植こそが重要な課題であったことを示した。また、そこで台湾の人々に呈示されたものは、「宝物」、すなわち中国本土から移送された皇帝のコレクションであることを示した。この点を踏まえ、本節では、「復院」後30～40年たった「建院70周年」と「建院80周年」の間にはいかなる連続性と非連続性があるのかについて検討する。さらに、その両者と「復院」当初の姿との差異についても論及する。

1. 「建院70周年」

1995年に台北故宮は「建院70周年」（以下、70周年）を迎えた。70周年にあたってさまざまな記念式典が行われたこともあり、この年の入場者数は1965年以來、それまでの統計上第2位となっている。また、当時の院長の職にあった秦孝儀は、この1995年から3年連続で、それぞれテーマを定め、従来の成果と今後の展望について、国民党中央常務委員会で報告を行った。その際の資料が台北故宮に残されており、この内容を分析することによって、当時、台北故宮がどのような組織としての展望をもっていたのかをうかがうことができる。

まず、1995年5月24日に行われた報告が、「國立故宮博物院工作報告——從宮廷博物院邁向民族博物院 進而至於世界級博物院之新境界——」（國立故宮博物院業務報告——宮廷博物院から民族博物院へ、そして世界の博物院への新境地——）というテーマによるものであった。その冒頭には、これまでの70年を回顧する形で、故宮の沿革が記載されている（秦孝儀 [1995: 1-4]）。

秦孝儀は、1925年の「建院」から1995年までの70年間にわたる沿革を、

1945年から1965年までが20年間となっているのを除き、10年刻みでそれぞれの時期にいったいどのようなことが行われたのかについての概略を述べている。また、70周年の記念として出版された『故宮七十星霜』（国立故宮博物院七十星霜編輯委員會編 [1995]）の「前言」は、この報告とほぼ同じ内容が簡略化されて記載されており、こちらは完全に10年刻みの記述となっている。

「振り返ってみると、大きく分けて1925年から1935年までの最初の10年は、所蔵品の整理と展示を重点としていましたが、残念なことにほぼ博物館の全体像が整ったときに『九一八』事変（満洲事変）が起り、北京が危うい状態におかれたのです。そこで、当時の蒋介石委員長は、故宮のコレクションは、歴代文物中の逸品であり、安全なところに置かねばならないとし、古物を南へと移動させる決断をしたのです」（秦孝儀 [1995: 1]）。

1925年からの10年を記す部分では、北京で「建院」された直後の姿が描かれている。所蔵品の整理は展示が公開された後も並行して進められていた。整理はまだ十分ではないものようやく全体像が見え始めた時に、満洲事変が起き、蒋介石によって、文物の北京からの避難が決断された。この決断こそが、清朝皇帝のコレクションである「宝物」を、紫禁城から移動させることになった。そして、どの「宝物」が移動させる価値があるかをはかるために、移動して保存すべき「逸品」の選定が行われることになったのである。

「次の10年間にあたる1935年から1945年までは、ひたすら流浪を続ける非常につらい歳月でした。故宮の文物は、戦火から逃れるため、北から南へ、そして西南へと12,000キロにもものぼる道のりを、粗末な交通機関により運搬され、上からは爆弾の脅威が、兵後からは大砲や機関銃が追いかけてくるというさまざまな惨事を潜り抜け、大後方の西南にまでたどり着きました。文物はなんらの損傷を受けることもなく、また遺失することもなく国宝を守るという重要な任務を達成しました」（秦孝儀 [1995: 1-2]）。

1935年からの10年は、戦火を避け、文物を中国内陸部へと異動させた様子が記されている。そしてここで強調されるのは、博物院とそこで働く人々がこれまでどのように努力し、いかに「国宝」を損傷させず、遺失させることもなく、整理し保護してきたかという点である。

「1965年から1975年までの次の10年間は、故宮、台湾での再建の時期です。政府は国家の再興にあたって、1965年に台北市外双溪にある現在の場所に、博物館を完成させました。規模は大きくないものの、近代的な博物館としての雛形を備えています。以降ここは中国芸術と清国史の重要な研究機関となるとともに、台湾地区におけるもっとも主要な観光スポットともなりました。

1975年から1985年の10年間は、故宮拡張の時期です。建物は2度の拡張を行い、文物は分類ごとに収蔵整理が行われ、最新式の設備に収蔵され、また最先端の方法で展示されました。紫禁城に元来あった文物のほか、各方面からの寄付、購入計画を広く募りました」（秦孝儀 [1995: 2-3]）。

1965年以降が、台北故宮の沿革になる。保存およびそれを支える科学技術と研究、そして観光についてはひとつおり触れられている。また「中国芸術と清国史の重要な研究機関となる」という学術研究にかかる点、および近代的博物館の基礎が作られた点が記されている。しかし、第1節で記したような「復院」当初に大きな役割として設定されていたと考えられる対外的な「中華」の宣揚、そして台湾内における中華文化復興運動との関連や「中華」の内在化といった点、そして社会教育については言及はない。

次に、秦孝儀は前記報告の翌年の1996年6月19日に、国民党中央常務委員会で行った「國立故宮博物院工作報告——一元文化的民族博物院導向多元化的發展——」（國立故宮博物院業務報告——一元文化的民族博物院から多元的な發展へ——）という報告のなかで下記のように、台北故宮の「復院」以降の変容についても言及している。そこで強調されるのは、台北故宮は、本来

清朝皇帝のコレクションを受け継いだ宮廷式の博物館として誕生したが、その後、近代的な「民族博物館」へと機能を転換したという点である。

「故宮博物院が台湾に建設されて以来30年、国内外の公的機関や個人の方々から貴重な宝物の寄付やお預かりをいただいたほか、当院としても十数年に及んで積極的に購入し、コレクションを充実してきました。収集の範囲はしだいに広がり現代工芸芸術品にまで及んでいます。このため、すでに故宮博物院は当初の『宮廷式』博物館という範疇から脱却し、華夏民族が7000年もの間綿延とし受け継いできた歴史文化を表す世界に通用する、以前とは異なる民族博物館となったといえましょう」（秦孝儀 [1996: 2-3]）。

ここには「復院」の後、宮廷式の博物館から脱するために、意識的にそれまでのコレクションの不足を補ってきたことが記されている。その目的は、皇帝のコレクションという限定的な「中華」から脱し、一元的「中華」文化を展示できる民族博物館を目指すというところにあった。つまり、秦孝儀は、台北故宮を皇帝のコレクションを基盤としながらも、その後の収集や寄贈により、世界に類のないひとつの民族の文化・芸術を、古くは新石器時代から、新しくは近現代まで、7000年のコレクションを備える博物館になったと位置づけるのである。

これは、前節で述べた蔣復璁の考え方とは異なるものといえる。蔣復璁は、中国本土から移送した「宝物」、およびその背景にある歴史をもって「中華」そのものとみなし、台湾社会の求心力としようとした。それに対し、秦孝儀は、その「宝物」はあくまで皇帝の私的コレクションであり、また台湾への移送においても十分な配慮はなされたものの、「中華」全体を語るためには本来的な欠損があったとみなした。一元的文化としての「中華」を展示するための民族博物館の建設のためには、中央研究所蔵の考古資料などとあわせて展示するといった考慮も必要があり、さらに、宮廷、そして中国から流出した文物の購入も図らなければならなかった。他方、購入予算は限られて

いたので、寄贈という手段も重要なコレクション補充の方法となったのである。

また、秦孝儀は「コレクションには華夏民族『一元』文化という特色がありますが、故宮博物院は業務運営では、『多元』的な発展を目指しています」（秦孝儀 [1996: 3]）と述べている。所蔵品は「中華」という点で「一元」的这种特色をもっているが、博物館の運営では、単なる文物の展示・保存にとどまらず、先進的な科学技術を導入し、文物の保護・整理・修復を行い、学術的な研究を進め、国際交流を推進するといった「多元」的に業務を進めていこうとする志向があることがここから読み取れる。

その背景には、最新式の技術を用い、展示を行う国際標準的に世界レベルといえる博物館を目指すという目的があるが、上記のような志向には、この後台北故宮が打ち出す各種運営方針の基礎をみることができるとはあるまいか。秦孝儀の後の歴代院長の下、台北故宮は、保存・収集・展示といった博物館の基礎的な業務だけではなく、研究や国際交流の推進、文化産業の強調や博物館と住民の生活文化とのつながり、そして新たな現代文化の創造を目指そうとする。つまり、その各種事業の萌芽的な発想がここに表れていると読み取れることは可能であろう。

さらに、目標が一元的な民族博物館の完成に置かれているからこそ、台北故宮の所在地である台湾社会の文化財や現代台湾創作者の作品などを無視することはできなくなっていった。すなわち、それら「台湾」に関わる文物を全体のコレクションに包含しつつ、「中華」の文脈のなかに位置づけることによって一元性は貫徹されるという点を故宮は意識せねばならなくなったのである。そのため、民進党政権の誕生を待たずして、政権交代前の国民党政権下において、台北故宮は台湾社会との関わりを重視するようになっていったと考えられる。

「故宮のコレクションと展示は、もともとは清朝までのもので、脈々と今日まで伝えられてきた中華文化を表していました。当院では、それをさ

らに広げ、近代文物陳列室において、現代台湾の工芸家の作品を展示することでそれを補い、また、中華民国以降の書画の名作を展示し、皇帝のコレクションに繋がるものとなりました。そして台湾現地の芸術家に対し『伝統からの創造』を鼓舞激励しています」(秦孝儀 [1996: 4-5])。

上記の秦孝儀の言葉に、台北故宮がその所在地であり、多くの入場者の居住地である台湾を、現在に至る「中華」文化の文脈のなかに包摂しようとする意思が読み取れる。さらに、「伝統からの創造」という、中国本土から運んできた文物を新たな文化の創造の基礎とするといった考え方を提出している。

このような方向性が、当時総統であった李登輝によって進められた政治的な動きと無縁ではないことは下記の記述からわかる。

「総統により政治の民主化が進められ、経済的に豊かになり、社会的に開放されたことによって、今日の台湾は文化発展の楽園となり、芸術が育つ優れた環境が整いました。今後、故宮は国策である『文化の新中原を開く』を推進し、『多元化』の方向への発展を目指します。故宮は重大な使命を担って、民族伝統の源を発揚し、そして国民の人文や芸術の素養を高めるために、故宮全体の館員一同一致して全力で邁進し、固有の歴史文化を固有の基礎の上に再生し、さらに大きく光り輝くものとします」(秦孝儀 [1996: 17])。

ここには「文化の新中原を開く」というスローガンが使われている。「新中原」は台湾に開かれるということであるので、国民党政権下で強調されてきた台湾こそが伝統「中華」を継承するものという視点が含まれているのは間違いない。しかし、なぜ台湾で新たに「新中原」が開かれる可能性があるのかについては、経済的に発展し、政治的に民主化が進んだ台湾からこそ芸術を育む環境が整い、文化の発展において理想的な場所となったと述べられ

ている。これは、「復院」当初の中国本土からの「宝物」の移送先、容器として台湾をとらえるのとは、異なる立場を示すものといえよう。

このような方針が、1999年1月に提出された『整合七千年文化體系 開創華夏文化新中原 新世紀』（七千年の文化体系を統合し 華夏（中華）文化の新中原 新世紀を開く）という国立故宮博物院白書へと結実する（国立故宮博物院 [1999: 4]）。この白書は、過去の業務と成果の全体像を回顧した上で、今後の台北故宮の進むべき方向性を示したものである。そこでは、台北故宮の所蔵品は「復院」当初より大幅に増え、単にかつての皇帝のコレクションを補充するばかりではなく、所蔵品の範囲を広げた結果、新石器時代から近代、そして現代の台湾までめんめんと続く7000年の一貫した民族の文化体系を展示できるようになったことが示されている。つまり、コレクションの拡充の成果として、台湾に「新中原」が開かれる可能性が生まれたという認識をそこに見出すことができる。

購入や寄贈による経年的文物の増加という偶然、また一元的文化を展示する民族博物館を形成するという志向の下での意識的な文物の購入と収集という必然が、コレクションの性質を徐々にではあるが変化させていった。このようなコレクションの変化は、「復院」当初は文物の単なる一時的な容器であった「台湾」との関係を変質させることになった。さらに政治の民主化や経済の自由化によって、台湾が世界に対して文化の発信基地となりうるという政治的な判断、そして、台北故宮が中華民国政府の予算で動かされており、その支弁者が台湾の人々であるという現実、このようなさまざまな事象が重なりあっていくなかで、台北故宮も自らを再定義する必要性が出てきたととらえることができよう。

2. 台北故宮と本土化

2000年に民進党政権が誕生すると、国民党政権末期に徐々に拡大し、民進党がさらに推進させようとした本土化を、台北故宮はどのように取り扱うの

かという課題がより表面化する。民進党政権下の台北故宮の変遷については、民進党政権時の資料を用いて松金 [2011] で論及した。ここではその時使用した資料に加え、2008年に再度政権交代があった後、新たにまとめられた台北故宮の沿革である「傳承與開創 故宮簡史」(伝統と創造 故宮略史)(馮明珠 [2009])を用いて台北故宮と本土化との関係性を考えていきたい。なぜなら、この資料を通じることによって、政権交代後の国民党政権下の台北故宮執行部が民進党政権下で行われた各種事業をどのようにとらえているのかについてより明確になると考えたからである。

まず、政権交代後の台北故宮の様子を、編者であり現在副院長である馮明珠は以下のように記している。

「2000年5月、中央研究院の杜正勝院士が院長となり、台湾本土の文化を定着させるとともに、台湾意識の強い国立故宮博物院の経営にあたりました。そして2003年には、杜院長の指導の下に、『フォルモサ——17世紀の台湾・オランダと東アジア特別展』が開催されました。会期期間中に、展示名に関してさまざまな意見が交わされたことを受け、その後『王城在現』と名称を変え、国立台南社会教育会館で再び展示が行われました」(馮明珠 [2009: 4])。

ここでは、新たに院長に任命された杜正勝が、明確に台湾本土文化という意識をもって台北故宮の経営を進めたと記されている。その代表的な事例として、2003年に開催された「17世紀の台湾」という台湾をメインテーマにした展覧会があげられている。台湾に関わるコレクションの収集は、一元的な民族博物館への志向という意味でふさわしい所蔵品の完備という視点から、すでに前院長の時代から始まっており、杜正勝が始めたものではない。とはいえ、東アジアという枠組みのなかで、台湾をオランダと関係づけながら位置づける試みがなされたのはこの展覧会が始めてであった。これまでの台湾コレクションの展示が清朝文化と関係づけられて論じられることが多かった

ことを鑑みると、従来の「中華」文化の流れのなかに台湾を位置づける展示とは一線を画する企画であったといえよう。

一方、下記にあるように、杜正勝は、「復院」以来の形式である陶磁器、青銅器、書画といった文物の種類を基準として大分類されていた展示を、古代から近代へと時系列にしたがって展示する方向に変化させた。

「杜院長は史学研究者です。院長着任後、素材やジャンル別に分かれていた展示を時代ごとに展覧できるように改めるよう命じました。本館の動線改良工事を行う際に、陳列室の全面改修をもあわせて行い（第5回拡張工事）、所蔵する各種の文物により8000年に及ぶ歴史の流れに沿った展示に変更されました。展示は『文明の曙——新石器時代』から始まり、『古典文明——銅器時代』、『古代から伝統へ——秦～漢』、『つながりと融合——六朝隋唐』、『新しい典型の建立——宋～元』、『新装飾の時代——明朝前期の官營作坊』、『官民が競った時代——明の晩期』、『盛世の工芸——清朝の康熙、雍正、乾隆』、そして『近代へ——清の晩期』といった時代別の展示となりました」（馮明珠 [2009: 4]）。

馮明珠は展示形式の変更について、杜正勝が史学研究者であることを要因のひとつとしてあげている。たしかにそのことも考慮すべきであろうが、ここでより注目すべきは、このような展示を可能ならしめたのは、宮廷式の博物館から民族博物館への転換への志向、そしてそのために行った文物の収集があったからであろう。杜正勝が説く「中華」文明の期間そのものは8000年であり、秦孝儀の説明よりさらに1000年ほど長い。杜正勝による展示形式の変更は、8000年の連綿と続く中国の歴史の流れのなかに、台北故宮の所蔵文物を位置づけていくものであった。

また、杜正勝は「故宮 新世紀」というスローガンを提唱し、下記のような目標を掲げる（杜正勝 [2001]）。

①政治性からの脱却——芸術文化の本質への回帰

- ②多元化・大衆化・国際化——同心円史観，社会との関連性重視，国際交流の推進
- ③研究・教育・レジャー——学術研究への寄与，芸術教育推奨，芸術の生活化
- ④制度改革——国立故宮博物院組織条例の改正
- ⑤建設——本館の改築，故宮南院の建築

これを秦孝儀の掲げた「開創華夏文化新中原 新世紀」（華夏文化の新中原新世紀を開く）と比較してみると，故宮のコレクションを手がかりに21世紀へ向けての台北故宮の新たな方向性を模索しようとしていたという点においては両者の近似性を感じさせる。

たしかに杜正勝はスローガンに、「中華」や「華夏」，そして「中原」という言葉は入れない。また，歴史教育の側面では，台湾を軸として，中国，そして世界へと視野を広げていくとする「同心円史観」，および台湾社会の多元性という自説を持ち込んだ。そういった意味で，「中華」を台湾を包摂する一元的な存在とはせず，台湾社会の多元性のなかで台北故宮がいかに関わっていくのかという問題意識を強くもっていることは明らかであり，一元的文化を展示する民族博物館の確立を目指した秦孝儀とは相容れない独自の方針も示している。

しかし，上記「芸術の生活化」という方針にみられる芸術を博物館のものだけにせず，生活のなかに取り込んでいくべきといった立場は，秦孝儀の「古い芸術作品によって現代人の生活のなかに新たな命を吹き込むことによって，現代の人々と古典芸術の距離を近づけよう」（秦孝儀 [1996: 6]）といった立場と，台北故宮のコレクションを現実の生活と結び付けようとする点において通底するものがあるのではないだろうか。

さらに杜正勝は，台北故宮の収藏品は，北平故宮博物院，中央博物院，台湾における収集，寄付受領の3つから構成されているとしており（松金 [2011: 72]），これは秦孝儀の見解と同一である。また，学術研究の重視や国際交流の推進，青少年への教育を重視などの具体的な事業については，杜正

勝は秦孝儀時代の台北故宮の方針をほぼ踏襲している。

このように、両者の間には「中華」と台湾との関係や台湾社会の多元性をどのようにとらえるのかについては、大きな変化がみられる。しかしその一方で、台北故宮が台湾社会や台湾の人々の生活に関わっていかうとする姿勢のほか、博物館のもつ恒常的業務や機能の継続性がそこには垣間みえ、政権交代とは直結しない連続性がそこには存在していると考えられる。

3. 「建院」80周年と70周年における沿革認識の差異

2004年、杜正勝が教育部長に転任したため、副院長であった石守謙が院長を引き継いだ。この石守謙が院長在任中の2005年10月に台北故宮は「建院80周年」（以下、80周年）を迎えた。その際、石守謙は、秦孝儀とは異なる時期区分を行い、台北故宮の沿革を振り返っている（石守謙編 [2005b: 4]）。石守謙は次のように、故宮の80年の歴史を台北に現在の博物館の建物が建設された1965年を境に前半の40年と後半の40年とに分けている（松金 [2011: 73-74]）。

「国立故宮博物院は2005年10月に創立80周年を迎えます。これまでの80年間の歴史を振り返ると、故宮博物院の歩んできた道は台北院舎が建設された1965年を境に、その前後の2つの段階に分けることができます。1965年以前の40年間は国宝の保護と収蔵が中心でした。その後の40年は、真に学術・教育・文化的機能を発展させた時期であるといえます」（石守謙編 [2005b: 4]）。

その上で、「博物館としての」歴史は、1965年以降に始まるとし、博物館としての起源を北平故宮博物院や中央博物院に求めるこれまでの考え方は、若干異なる見解を示した。とくに、重点を所蔵文物の保管から、一般公開へと移したことこそが、後半40年のもっとも大きな意義と位置づけ、公開と展

示によって、台湾の人々に「中華」文化を実感させることが可能となり、海外の人々にはそれを知ってもらう最良の方法となったとしている（石守謙編 [2005b: 4]）。

ここで石守謙は、「復院」当初に取り組まれた試みに言及している。ひとつは、所蔵文物の理解を通じて、台湾の人々に「中華」文化を実感させようとしたことである。そしてもうひとつは、海外の人々に「中華」文化の精髓が台湾にあることを示そうとしたことである。

さらに、石守謙はそれらを踏まえつつ、80周年を迎えた2005年から第3期目が始まるという新たな視角を示している。そこでは、「より見学者の目線に」立つことが方向性として示されており、所蔵する芸術品や文物をより深く理解することによって、21世紀の新たな文化が切り開かれる可能性があるとする。

このような石守謙による沿革認識は、前述した70周年時の秦孝儀による認識と比較すると、どのようなタイムスパンで時期区分を行うのかという点で、その違いは顕著である。70周年時の沿革は、10年刻みにすることにより、中国本土における歴史と台湾へ移動した後の歴史とを均質的に連続性をもってとらえようとする、いわば「中華文物の流転史」とでもいうものであろう。それに対し、80周年時の沿革は、台北での「復院」を画期とすることによって、中国本土における歴史はあくまで現在の台北故宮の前史であり、そういった意味で連続性を意識しつつも、現在の博物館としての歴史は1965年から始まるという非連続性を織り込む「現行の博物館の形成史」というものになっている。

さらに、70周年と80周年、それぞれに示された沿革に対する歴史的位置づけを通じてみえてくるのは、10年刻みであるのか、40年刻みであるのかといった形式的な問題にとどまらない。70周年時の沿革においては、博物院とそこで働く人々がこれまでどのように努力し、いかに博物院を作り上げてきたのかということが主たる内容として記述されていた。それゆえ、70周年の沿革では「復院」当初の台湾および海外の人々への「中華」文化の呈示という

取り組みにも触れていない。それに対し、80周年の沿革は、「復院」以降、博物院が行ってきた諸活動は、社会や見学者に対し、どのような役割を果たしてきたのかという視点からの記述になっており、そのため「復院」当初に、台北故宮が台湾と海外に対して行った重要な事業と位置づけ記している。

つまり、70周年時の沿革が、博物館の内部で何が行われてきたのか、それがどのように博物館を作り上げるのに寄与してきたのか、そして今後どのように作り上げていくべきかという内向きの記述を社会と共有化しようとする形になっているのに対し、80周年時の沿革は、博物館としてこれまでいかに外部と関わってきたのか、その関係性を強調し、将来へとどう結び付けていくのかという記述となっているといえる。

ここから、70周年時にみられた台北故宮の再定義の必要性が、80周年時ではさらに強まり、台湾社会のなかでいかなる位置づけを与えうるのか、そして今後どのように関わるべきなのかといった視点を呈示しなければならないという考慮がそこに加わっていることがわかる。70周年時においては、一元的文化を展示する民族博物館における統合概念としての「中華」のなかに台湾をどう位置づけるのかという点が課題であった。ところが、80周年時では、多元的な文化で構成される台湾社会のなかに、皇帝のコレクションという本来きわめて限定的な「中華」をどのように包摂し、位置づけるのかという点を考える必要が出てきたといえよう。そして、将来の展望として語られるのは、「故宮博物院が所蔵する貴重な芸術品や文物がより深く理解されるだけでなく、21世紀の新たな文化を切り開くにあたって、より多くの貢献をすることができると深く信じています」(石守謙編 [2005b: 4])という新たな文化の創造に対する台北故宮のコレクションの貢献という点である。

第4節 国民党の政権復帰と故宮

2008年の国民党による政権奪回により、院長に就任した周功鑫は、北京故

宮との交流を促進し、故宮南院のアジア博物館としての位置づけを見直すなど、民進党政権下で行われてきた台北故宮運営とは大きく異なる方針を打ち出したとみなされることが多い（野嶋 [2011]）。しかし、これまで記してきたように民進党政権期の台北故宮運営にはそれ以前の秦孝儀時代から継承されてきた部分があることを考えると、民進党末期の台北故宮で実際に行われていたことと、新たに打ち出された運営上の方向性との間にも何かしらの関係性があるのではないかと推測される。本節では、民進党政権下の最後の院長となった林曼麗による運営と周功鑫による運営方針との関係性について言及し、政権交代とは必ずしも直結しない台北故宮のありようについて検討を加える。

1. 林曼麗の「Old is New」と民進党政権の終焉

石守謙退任の後院長となった林曼麗は、「Old is New」や「時尚故宮」（時代の先端を行く故宮）というキャッチフレーズのもと、さらなる改革を進めた（野嶋 [2011]、松金 [2011]）。

「傳承與開創 故宮簡史」によれば、以下のように国内外のブランドと提携し、ファッショナブルな商品を次々と作り出していったことがわかる。

「2006年には行政院の改造が行われ、林曼麗が院長に就任しました。林院長は2年の任期中、全力で『時尚故宮』を推進。『Old is New』という文化の創意を主軸とし、故宮グッズの研究開発を行い、グッズのデザインは大きく変わりました。また、パテント授権により、日本のサンリオ（Sanrio）、イタリアのアレッシィ（Alessi）、フランツ（FRANZ）、そして義美食品等の国内外の著名なブランドとのコラボレーションで、時代にあったさまざまな商品を開発しました」（馮明珠 [2009: 5]）。

また、林曼麗は2006年版の『國立故宮博物院年報』で以下のように述べて

いる。

「故宮のコレクションは華夏文化の精髓を代表しており、歴史・芸術・工芸発展の過程がわかります。博物館の存在意義や使命とは、文物の保存・研究・収集・展覧にとどまらず新たな価値を生み出すことにあり、これは現代社会における博物館が向きあわねばならない挑戦と課題であると考えます。故宮のコレクションと現代の最新テクノロジー、また現代的な美と創造性を結合できれば、博物館はより多元的な面をもつ、文化創造産業においてもっとも重要で、もっとも豊かな宝庫であり、経済的価値をもつコアな産業、ひいては、経済複合体へと発展するでしょう。故宮は国際的なブランドイメージを高めていくだけではなく、今まで創造され伝えられてきた中華文物を、より深みのあるものとすることで、斬新な面や時代性のある新しい文化価値をもたせ、世界に伝え、宣伝していき、また台湾の文化創造産業にエネルギーを与え、そのモデルとなることを目指します」(金士先編 [2007: 5])。

故宮の所蔵品は華夏文化の精髓であるということを認めつつ、それを保存・研究・所蔵・展示することはもちろんであるが、それに加えていかに新たな価値をそこに生み出していくかは、現代社会において必ず直面し、チャレンジすべき課題であるとしている。これは先述の石守謙の「21世紀の新たな文化」に対する「貢献」という点を踏まえさらに展開したものといえよう。また、古くから伝わってきた文物には、新たな文化的な価値があり、それは台湾文化産業にとってかけがえのないお手本になるものと位置づけている。

さらに林曼麗は、台北故宮の文物の文化的価値について、「中国歴代王朝の収蔵品という枠を越えて人類の文化遺産なのです」(森 [2008: 30])とみなし、「中華」でも、「台湾」でもない、人類の文化遺産という価値づけを与えて評価している。そして、台湾文化の多元性とそのなかでもっとも重要な位置を示しているのが、漢文化であるとした上で、「それ(漢文化)を否定す

ることはできないし、また、否定することもないと思います。」と述べ、「漢文化の優れた文物が台湾にあることは感謝すべきで、台湾にとり力強く、幸せなことなのです。これからは、いかにして、自信をもって、自分の文化のなかに取り込み、消化吸収して、今度は本当に台湾の新文化を創りだしていく、それが大事です」と、台北故宮の文物を「漢文化」を代表するものと位置づけ、新たな文化を台湾に創造するために、それらを「消化吸収」していくべきと述べるのである（森 [2008: 30]）。言い換えれば、林曼麗は、台北故宮の文物は、自らの生活とは無関係な外在的な存在ではなく、内在化すべきものであると述べているともいえる。そのためには、台湾の人々が台北故宮を畏敬するのではなく、身近な存在としてとらえる必要があり、そのために、「時尚故宮」のスローガンやその下で生み出されたグッズは両者の関係を縮める機能を十分に果たしうると考えられる。

2. 国民党政権の復活と周功鑫の運営方針

2008年に院長となった周功鑫は、以下のように台北故宮の特色を述べている。

「博物館の経営理論からいえば、博物館はまずその使命を確立し、明確にさせる必要があります。そうすれば将来の発展の方向性を定めやすくなります。博物館の世界では『収蔵品は博物館の心臓』という言い方があります。国立故宮博物院の心臓は、中華文化に伝わる文物と芸術品です。これら収蔵品の管理や保存・研究・展示・教育・推進等の作業を行うことで、故宮博物院はその機能をすべて発揮し、使命を遂行することができます。また、これにより自然と故宮博物院の特色をアピールすることもできます。これは誰の目にも明らかな発展の方向です。これらを怠れば困難が生じ、故宮博物院が発展することは難しいでしょう」（本刊整理 [2008: 4]）。

ここで周功鑫は、「収蔵品は博物館の心臓」という言葉を使った上で、台北故宮の心臓は「中華文化に伝わる文物と芸術品」である旨強調している。そして、それらに関して、管理・保存・研究・展示・教育・推進等の作業を行うことこそが台北故宮の使命であるとする。つまり、台北故宮の使命や目的をあらためて明確化し、その中心に「中華文化」を据え、その点を特色としてアピールしている。このような考え方を表明するのは、民進党による組織法案やアジア博物館として開設を目指す故宮南院の設立など、前政権下の台北故宮に「心臓」をおろそかにする部分があったという理解が周功鑫にあったためであろう。それは、「国立故宮博物院の心臓は、中華文化に伝わる文物と芸術品です」という言葉からも了知される。

しかし、前政権の施策を完全に否定しているわけではなく、就任後に施政方針を示した「形塑典藏新活力 創造故宮新價值」（コレクションに新たな活力を、故宮に新たな価値を）には、今後故宮が進むべき新たな方針が以下のように記されている。

「周院長は『コレクションに新たな活力を、故宮に新たな価値を』という方針のもと、現在、専門性を高める、若い力を入れる、そしてIT化、産業化の4方向に向かって故宮の経営を進めています。専門性を高めることは、博物館としての本分に戻るといってもあります」（馮明珠 [2009: 5]）。

ここから、周功鑫が台北故宮を運営していく上で、「コレクションに新たな活力を与え、新たな価値を創造する」、「所蔵品の特徴を生かした展示への復帰」、「博物館の産業化」、「コンピュータ技術の活用強化による近代化」、「若い人々の芸術を支援するプラットフォーム化」という5つの点を強調していることがわかる。

さらに、下記のように台北故宮には、2つの特質があるとする。ひとつは、全人類の文化遺産である8000年におよぶ「中華」文明を広く人々に知らせる

ということであり、もうひとつは台北故宮が所在する台湾の人々の生活文化の創意の基盤になってきたということである。

「国立故宮博物院の特質は、8000年の華夏文明（中華文明）を示すことです。台湾の人々にとっての貴重な資産であるだけでなく、全人類の文化資産でもあります。今半世紀以来、故宮と台湾の人々はともに歩み、新たな時代の流れに従って生活文化の創意の源となってきました。21世紀に入り、故宮はプロフェッショナルなサービス精神に基づき、豊かなコレクションのなかから新しい故宮の価値を創り出し、博物館としてマルチな経営を努力目標としています」（周功鑫 [2008: iv]）。

運営方針にある「所蔵物に新たな活力を 故宮に新たな価値を」という表現、また、「博物館の産業化」は、これまで述べてきたように秦孝儀以来、林曼麗に至る台北故宮のコレクションを現代社会や現代アート、そして人々の生活にどのように生かすのかという流れから大きく逸脱するものではない。先端科学技術の利用や台北故宮がもつ近寄りがたい雰囲気解消するために若者たちに芸術活動の場を与え、若者の取り込みを図ることなどは、国際的標準を満たす世界レベルの博物館を目指し、予算的にも業務的にも継続して取り組まれてきた古くて新しいテーマである。

つまり、そこには前政権下での方向性も含みこむ形での博物館運営という側面における連続性が示されている。政権交代後も台北故宮による台湾社会との関係を縮める努力は継続されていく。

なお、台北故宮の特質を8000年におよぶ「華夏」文明を広く人々に知らせることとしつつも、それは台湾の人々にとっての貴重な財産であるばかりではなく、全人類の文化遺産であるとしており、台北故宮の文物を「人類の文化遺産」とみなす点は、林曼麗の主張とも共通するところである。

おわりに

戦後、国民党政権は日本の植民地であった台湾を、中国や「中華」といった統合概念を用いることによって、ひとつの社会を形成し、維持し、継続させていこうと試みてきた。学校教育においても、社会教育においても、それは広範に進められてきた。そういった文脈で、台湾で「復院」した台北故宮の位置づけはきわめて明確であった。それは、皇帝のコレクションである文物を、一点一点価値の高い芸術品とみなすだけではなく、典型的な「中華」と位置づけるものであった。つまり、台北故宮とは、対内的には台湾の人々に「中華」を扶植し、対外的には「中華」文化の宣揚を行う機能を付与された博物館であった。

このような台北故宮の当初の役割は、その後、どのように変容していったのだろうか。

政治の民主化や経済の自由化が進展するなかで、国際社会における台湾の位置づけが変化し、本土化の潮流が新たな局面を作り出すこととなった。国民党政権末期から民進党への政権交代期にかけて、当初の役割が揺らぐと、台北故宮はなぜ自らが存在するのかといった疑問に答える必要が出てくることになる。そのため、皇帝のコレクションに依拠する宮廷式の博物館から一元的文化を展示する民族博物館への脱皮が目標に掲げられ、また一方で、普遍的な価値をもち国際基準を満たす近代的な博物館への変革が企図され、最先端の科学技術の導入による文物の保護と研究、青少年教育や社会連携、そして、コレクションを基礎とした新たな文化の創造、文化産業へのアプローチなどが目指されるようになる。

かかる状況下において、展示や研究、設備や文物の充実は、皇帝のコレクションを展示する博物館であった台北故宮を、「中華」を包摂する博物館へと変質させ、世界レベルの博物館へと成長させた。他方、台湾社会全体を巻き込む形で進展した本土化の潮流は、台北故宮とも無縁ではなかった。結果

として台北故宮は、一元性を貫徹させるために「台湾」を含みこむこととなる。

このような変化は、元来「中華」に包摂される台湾という軸を作り出すために準備されたものであった。しかし、台湾を含み込んだがゆえに、それとの関わりを常に意識する必要が生まれた台北故宮にとって、かかる状況は、同時にお手本としての「中華」をコレクションし、展示すればいいとする台北故宮の存在意義をさらに揺るがすことになった。

そのようななか、民進党への政権交代が起き、台湾社会を理解するにあたり、多元性という概念が着目されるようになる。杜正勝をはじめ民進党政権下の各院長は、台北故宮のコレクションそのものもつ文化的価値を否定することはない。しかし、それらコレクションをもって示される「中華」を、台湾を構成する一要素とみなし、位置づけ直そうとした。そのため、コレクションと台湾社会との距離を縮め、それを内在化した上で、新たな文化を創造するという方向性を打ち出す必要に、台北故宮も迫られるようになった。そして、国民党による政権奪回後も、台北故宮と台湾社会の間の距離を縮めようとする動きは継続されている。

つまり、台北故宮は、本来「中華」を世界および台湾に宣揚する存在から、台湾のなかに包摂される「中華」のあり方を示す存在へと変容していったということができよう。

本章では、院長の報告などに代表される台北故宮の運営方針に焦点を絞ったため、あくまで台北故宮がどのように事業を進めようとしたかという点を対象にした。そのため、院長の個人的な意向や業務担当者の動きに基づく分析、また、その展示や教育の受け手に関する分析に至らなかった。この点は、現在、台北故宮が北京故宮との間で進めている交流と合わせて考察を行うべきであろうが、それは今後の課題として結びたい。

〔注〕 _____

(1) 本章では、「『中華』文化」という表現を可能なかぎり使用することとする

が、資料によっては、「中華民族文化」、「中国文化」、「華夏文化」、「漢文化」などと表記されることもあり、資料中の内容に言及する場合には、そのように表記する。

- (2) 現在北京にある故宮博物院、および台北にある国立故宮博物院ともに、それぞれ自らの博物院は1925年に北京で創設されたととらえている。そのため、ここでは、「台北に設立」と表現しているが、後述するように、台北故宮は、1965年を新たな博物院の「設立」ではなく、「台北における復活」（中国語では「復院」）ととらえている。
- (3) 先行研究としては、文化外交の側面から台北故宮の展示の確立に大きな影響を与えたアメリカ出展を論じた呉淑瑛 [2003]、戦後兩岸関係のなかでの台北故宮の役割を論じた家永 [2007]、民進党への政権交代以降の台北故宮の新たな展開について論じた板倉 [2008]、2000年の国民党から民進党への政権交代以後の台北故宮の変革を論じた松金 [2011]、ジャーナリストとして取材した豊富な資料に基づき、北京と台北の故宮の関係性という新視角より2008年の国民党による政権交代後の北京故宮との交流までを含む形で通史的に論じた野嶋 [2011] などがある。
- (4) 杭立武 [1980]、国立故宮博物院七十星霜編輯委員會編 [1995]、家永 [2007]、松金 [2011] を参照して記述する。
- (5) 行政院主計處のホームページにおける「中央政府總預算及附屬單位預算」の「中華民國99年度法定預算」中の「歳出機關別預算總表」を参照 (<http://www.dgbas.gov.tw/public/Attachment/03191826871.XLS>, 2011年12月11日アクセス)。
- (6) 現在、交通部觀光局行政資訊系統 (<http://admin.taiwan.net.tw/>, 2011年12月11日アクセス) において2010年分まで公開されている。
- (7) 1998年の旅客数については、『観光統計年報』と『工作概況』との間に差異がみられる。
- (8) 中華民國国民の意であるが、具体的には、中華民國が実効統治する台湾・澎湖・金門・馬祖等に居住する中華民國国民を指す。
- (9) 『観光統計年報』に基づく台北故宮入場者は、1990年は188万3960人、1991年は199万6174人であり、大きな差異はない。ただ、『工作概況』の統計は各年度を7月1日から翌年6月30日までで区切っているのに対し、『観光統計年報』は、1月1日から12月31日までであり、期間が一致しない。その点を鑑みると、『工作概況』の1991年度は、1991年7月1日から1992年の6月30日までであり、313万301人の入場者数があったとしている。『観光統計年報』の1992年1月1日～12月31日の入場者数は、300万718人であり、やはり両者の統計に差異があることは間違いない。
- (10) 『工作概況』とは若干数値が異なるが、交通部觀光局『観光統計年報』「國內主要觀光遊憩據點遊客人數月別統計」（1996～2010年版）によると、1996～

2010年までの故宮入場者数は以下のとおり。290万874人、272万482人、323万5169人、166万7265人、197万6921人、214万9978人、210万1217人、132万7727人、154万4755人、263万7076人、199万5845人、265万551人、224万4284人、257万4804人、344万1238人。この統計によれば、1998年は再び300万人を突破しており、一概に減少しているとはいえない。しかし、その後、160万から250万程度を上下しており、2010年まで300万を超える入場者数はみられない。2010年の増加には、中国本土からの観光客増が影響していると考えられる。

【参考文献】

<日本語文献>

- 家永真幸 [2007] 「故宮博物院をめぐる戦後の兩岸対立（1949-1966）」（『日本台湾学会報』第9号 93-114ページ）。
- 板倉聖哲 [2008] 「『伝移模写』『探索亞洲』——台北故宮博物院の展覧会に見る二つの新たな方向性——」（『東方』第328号 12-14ページ）。
- 杜正勝編 [2002] 『普世の美 人文の粹 国立故宮博物院巡礼』国立故宮博物院。
- 野嶋剛 [2011] 『ふたつの故宮博物院』新潮社。
- 松金公正 [2011] 「台北故宮における『中華』の内在化に関する一考察——国立故宮博物院組織法の制定を中心に——」（植野弘子／三尾裕子編『台湾における〈植民地〉経験』風響社 55-98ページ）。
- 森美根子 [2008] 「台湾・故宮博物院長林曼麗さんを訪ねて」（『ASIAN REPORT』第355号 27-31ページ）。
- 湯原公浩編 [2007] 『別冊太陽 台北 故宮博物院』平凡社。
- 林衡道 [1974] 『故宮博物院と中国文化』青文出版社。
- 林曼麗 [2007] 「美術館もひとつの表現です」（『芸術新潮』第58巻第1号 82-83ページ）。

<中国語文献>

- 本刊（故宮博物月刊）整理 [2008] 「承擔使命・開創未來——周功鑫院長談話録——」（『故宮文物月刊』第304期 pp. 4-9）。
- 杜正勝 [2001] 「認識台北國立故宮博物院講演録」（東京国際大学における講演録）。
- 馮明珠 [1994] 「國民政府時期的故宮博物院」（國父建黨革命一百周年學術討論集編輯委員會編『國父建黨革命一百周年學術討論集 第三冊——抗戰建國史』台北 近代中國出版社 pp. 656-683）。
- [2009] 「傳承與開創 故宮簡史」（馮明珠編『故宮勝概 新編』台北 國立

- 故宮博物院 pp. 1-5)。
- 國立故宮博物院 [1971]『國立故宮博物院六年工作報告 (中華民國54年 9月~60年 6月)』台北。
- [1972]『國立故宮博物院工作概況 (中華民國60年 7月~61年 6月)』台北。
- [1977]『國立故宮博物院業務概要』台北。
- [1999]『整合七千年文化體系 開創華夏文化新中原 新世紀』(國立故宮博物院白書)台北。
- 國立故宮博物院七十星霜編輯委員會編 [1995]『故宮七十星霜』台北 台灣商務印書館 (日本語版: 温井禎祥訳『故宮七十星霜』台北 國立故宮博物院 1997年)。
- 蔣復璁 [1977]『中華文化復興運動與國立故宮博物院』台北 台灣商務印書館。
- 交通部觀光局 [各年版]『觀光統計年報』(<http://admin.taiwan.net.tw/>, 2011年12月11日アクセス)。
- 金士先編 [2007]『國立故宮博物院年報 中華民國九十五年』台北 國立故宮博物院。
- 杭立武 [1980]『中華文物播遷記』台北 台灣商務印書館 (日本語版: 池田篤紀訳『中華文物播遷記』台北 台北梅迪企業)。
- 林曼麗編 [2007]『物華天寶—— Old is New 導讀新故宮 Guidebook ——』台北 國立故宮博物院。
- 秦孝儀 [1995]「國立故宮博物院工作報告——從宮廷博物院邁向民族博物院 進而至於世界級博物院之新境界——」中國國民黨中央常務委員會專題報告。
- [1996]「國立故宮博物院工作報告——元文化的民族博物院導向多元化的發展——」中國國民黨中央常務委員會專題報告。
- [1997]「國立故宮博物院工作報告——心靈提升在故宮——」中國國民黨中央常務委員會專題報告。
- 石守謙編 [2005a]『導讀故宮』台北 國立故宮博物院。
- [2005b]『國立故宮博物院 中華民國九十三年年報』台北 國立故宮博物院。
- 吳淑瑛 [2003]「展覽文物所有權與文化外交——以故宮一九六一年赴美展覽的交涉為例——」(『近代中國』第155卷 pp. 93-115)。
- 行政院主計處 [各年版]『中央政府總預算』(<http://www.dgbas.gov.tw/ct.asp?xItem=26269&CtNode=5389&mp=1>, 2011年12月11日アクセス)。
- 周功鑫 [2008]『形塑典藏新活力 創造故宮新價值』台北 國立故宮博物院。
- 周密 [1985]「國立故宮博物院的建制與沿革」中國文化大學藝術研究所碩士論文。